

古典教育を考える

これからの教育課程改訂において、
 古典教育はどのように位置づいてくるのでしょうか。
 現代における古典を学ぶことの意義と
 学習指導の工夫について考えます。

古典を学ぶ喜び

なぜ古典を勉強するのか

かつて高校の教師をしていたときに「なぜ古典を勉強するのか」と、生徒から質問された。とりあえず納得する答えは「受験にあるから」だが、この答えは、生徒も私も本当のところは腑に落ちなかった。

そこで、「人生にはいろいろなことがある。壁に当たったとき、今まで知らなかった異文

梅花女子大学
 加藤 康子

化が何かヒントをくれるかもしれない。外国の知識や考え方、感性は刺激的で、いい智慧を提供してくれるが、過去に戻って祖先が語り継ぎ、書き継いで来た物語などからは勇気が与えられるかもしれない。だから古典を勉強するのだ」と考えることにした。

そうは考えたものの、古典を知らなくても生きてはいける、無理矢理に勉強するより、関心をもったときに改めてひもとく方がいい

のではないかと密かに思った。

伝承の大切さ

ところが、ここ一、二年、気持ちが変わってきた。祖先から長く伝承されてきた昔話などが伝えられなくなっている現状を、いろいろな研究者から聞くようになったからである。

「いまや、日本では、昔話の伝承は途絶えた。子どもの本や絵本によって、あるいはアニメーションなどの媒体によって再話されるだけになった。もちろん伝えられてきた内容を大きく逸脱し、意味がすっかり異なってしまうことには問題があるが、もともと多少の違いというものは、それぞれに伝えていく中で語り手の個性としてあったことだ。まずは伝えていくことが大切なのだ」という考え方に接するようになった。

そして、長年にわたって昔話の採集、分析を続けてきた研究者が、「人は生きていく上で様々な思いや考えを抱くが、それを語りたいと欲求するのが人間。そこに文学は生まれる。文字はなくとも、文明は不充分で、文学を持たない民族はない」と、昔話の伝承の必要性を強く語ることは心動かされた。

私たちは祖先から、物語の形で、あるいは歌の形で、人生の意味や日々の悩みの解決の方法、人の持つ情や信条を伝えられている。

ことばの解釈と背景の歴史や文化状況を説明しなければ伝わらなくなっているのが現状だが、そうした工夫を加えてでも、民族が伝えてきた文学、すなわち伝承を後世に伝えていかなければならないと、今は危機感をもって感じている。目の前の若者たちに伝えなければ、次の世代に伝わらない。今の時代の子どもたちが知らなければ、本当に途絶えてしまうのだという危機感である。

子どもとつこの伝承

一方、子どもたちをめぐるさまざまな問題が日々起こっている。私が現在接しているのは十代の終わりから二十代の女性たちが多いが、時折彼女たちの悩みに接することがある。以前はもう少し若い世代の思いに接する体験もした。その中で感じるのは、生きるための〈智恵と勇氣〉が、子どもとその周辺の大人にもう少し欲しいということである。

子どもにとって、生きるための〈智恵と勇氣〉は、知識だけでは身に付かない。身近なところにおいて、愛情を持って見守る大人が存在することによって、初めて血となり肉となるのではないかと考えられる。そうした大人の存在が何よりも大切だと思うが、幼い子どもの場合、この〈智恵と勇氣〉は〈物語経験〉によって認識することができるようである。

つまり、直接話を聞かせてもらうこと、あるいは本や絵本を親しい大人に読んでもらうことが積み重ねられていくことによって、身近な大人の存在とその愛情を感じ、そして物語の中に展開する人生の〈智恵と勇氣〉を身に染みて受け止めることができると思われるのだ。こうした〈物語経験〉を幼い頃から繰り返していくことによって、子どもは想像力の翼を広げ、物語世界をいっそう楽しむことができるようになる。さらにその物語を、身近な大人、あるいは同年代や異年齢の子どもたちと直接交流する中で体験できれば、それぞれの豊かな想像力の翼を他者と共有する喜びも感じ、そこに子ども同士、また子どもと大人との「心の絆」を結ぶことが可能になる。

伝承による〈物語経験〉の重要性は、長年民族が培ってきた生きるための〈智恵と勇氣〉を次世代の一人ひとりに確実に伝え、その一人ひとりの人生を充実させることで、さらに次への伝承を実現させることにある。それだけ、受け止めた子どもにとっては、伝承による〈物語経験〉は深く浸透するといえよう。

メキシコの先住民ウィチョール族やイランの民族と交流し、伝承を採集しに行っている研究者から、これらの地域では現在でも二十代の若者まで民族に伝わる物語をすぐに語ってくれるということを知った。それは遠い異

国の、私たちには関係のない事のように思いがちである。

だが、絵本の読み語り、昔話のストーリーテリングの現場に接すると、話に夢中になっている子どもたちの様子に驚かされ、人は誰でも話を直接語り伝えられることが好きだということに気づく。その積み重ねが子どもたちに〈智恵と勇氣〉を与えていくことに思いをはせたとき、前述の地域の若い世代が当たり前のように伝承を実行していることが、にわかには羨望の思いと共に迫ってくるのだ。

アフリカの昔話の採集に行き、一族の中に一緒に住んで話を聞き続けた研究者は、昼間の労働に疲れた親たちに代わって、祖父母たちが孫たちに長年の経験を踏まえた人生への向き合い方をさまざまな話を通して語っていく伝承の場を説明してくれた。それは、人が生きる上で伝承がいかに大切かということ物語っていた。

私には、口承や書承による伝承、すなわち語り継がれ、書き継がれてきた物語を伝えていくことの重要性が切実な問題として迫ってきたのである。そしてこのことは、古典を学ぶ理由を考えさせることにつながった。

古典のおもひやり

現在私が担当しているのは、近代以前日本

児童文学という分野である。日本の子どもがかつてどのような文学体験をしてきたのかを考えると、まずは口承や書承による昔話、伝説、神話、説話などが挙げられる。また、絵巻物や絵入り本が一部の子どもたちに物語を提供してきた。『更級日記』の主人公が『源氏物語』を読む話、旅の途中で「竹芝寺の伝説」を聞く話は、その状況を想像させる。

さらに、多くの物語を提供した「御伽草子」は、木版刷りの絵入り本によって広く一般に浸透していったといわれている。それに続いて、同じく木版刷りの「上方絵本」、「草双紙」、「豆本」などの絵草紙が子どもの読み物ともなったと考えられる。

これらの作品に触れてみるといろいろな意外なことにぶつかる。例えば、「御伽草子」の「一寸法師」は姫に恋し、その思いを遂げるために手段を選ばず策略をめぐらす。「ものくさ太郎」は思い切った方法で気に入った女性を見つけるが、その心をつかんだきっかけは天性の和歌の才能だった。「天稚彦草子」の主人公の娘は困難に出会う度に根気強く乗り越えて恋する夫との出合いを手に入れる。「鉢かづき」の主人公の娘は、恐る恐る恋をしていく内に成長し、たくましくなっていく。また、『宇治拾遺物語』の「鬼に瘤取らるる事」「雀報恩の事」では、村人や家族に軽

んじられている爺や婆が、我を忘れて踊ることや雀の世話に夢中になる姿に生きる力の発露が感じられる。

絵を中心とし、文が加わって物語を展開していく、今日の絵本、マンガの源とも考えられる絵草紙では、素朴ながら力強い絵や、先行する絵巻物や手描きの絵入り本を継承しつつ新しさを加味した物語に魅力を感じる。

『きんときおさなだち』は金太郎絵本の源だが、力強く躍動的な描線に主人公の快童丸の強さが伝わってくる。一方、その快童丸を抱き、見つめる山姥の言動には母親のあふれんばかりの愛情が表現されている。金太郎は成長して源頼光の四天王の一人となるが、頼光たちの英勇譚は繰り返し描かれ続けた。そこには神の助力をもらって仲間と助け合いながらとてつもない鬼神たちに立ち向かっていく頼光たちの物語が展開する。荒唐無稽ではあるが、今日人気を集めているファンタジーの冒険物語に通じる魅力があったのではないかと考えられる。

想像力の豊かさは江戸期の絵草紙に多く見られるが、『真字・草字くらゐ諍ひ』ではカタカナとひらがなが合戦をするという発想がおもしろい。『道具の化物尽し』では、日用品が次々と化けていく絵が生き生きと描かれている。『是は御ぞんじのばけ物にて御座候』



江戸期の絵草紙。江戸中期に江戸で出版された赤本『鼠の嫁入』を改装して出版した作品。初産で子どもが生まれる場面。江戸期の出産の風俗が描かれ、子どもの誕生を祝う家内の様子が描かれている。江戸後期に改装されるほど浸透した。家蔵。

では、室町期の異類合戦物を引き継ぎながらも、新舊の化物たちが子どもたちの人気をかきつけて戦い合う発想やキャラクター化された化物たちの絵に漂う可笑味に新しさがある。そして、これらの絵草紙には作品の作り手と読者であった江戸期の庶民の生活に根ざした〈智恵と勇氣〉が読みとれるのである。嫁入り次第を動物などの異類で描いた嫁入り物には、結婚をめぐる行事が順を追って描かれる中に、力強く日常生活を生きていく人々の



江戸後期から明治前期に盛んに出版された豆本。右から江戸末期出版の『富貴遊』（日用品が擬人化され、それぞれ愚痴を言い合う内容）、『桃太郎』。明治前期出版の『花咲翁』、『宮本武勇伝』（宮本武蔵の逸話集）。それぞれ表紙は色刷り、中は墨刷り。木版による出版。家蔵。

姿が見出せる。「おにの四季あそび」「雷の四季咄」は、天上世界でさまざまな天候を生みだしている鬼たちの姿を描いているが、いろいろな仕事の作業風景や家庭内の団欒などが取りこまれ、日々の生活が活写されている。

このように古典の物語には、今日伝わっている話とは異なる面が見られたり、そこに力づけられるものを見出したりすることができ、「古典には意外性があるかもしれない」と思うけど、どう？ 捨てたものじゃないよ。」そのような気持ちで、現在は、「伊曾保物語」「御伽草子」「赤本」「上方絵本」「豆本」などを教材として扱っている。意外な思いから関心を持って読み進め、想像力をたくましくさせると、古典の中に現代の私たちにも通じる人々の生きる姿を発見することができる。そこに力づけてくれるものを見出し、古典を読むおもしろさを感じるのである。

古典の読み方

古典を読むときには、語釈や注釈の必要性が障害となって敬遠されたり、堅苦しくなったりする。だが、長い年月を越えてきた作品には、必ず魅力がある。古典が伝えてきた物語には生きるための〈智恵と勇氣〉が、わくわくする物語展開、言葉遊びや語調の楽しさや笑い、素朴ながら力強い絵、意外な発想な

どと共につまっている。幼い子どもほど、この語り継がれ、読み継がれた物語を経験する必要があるのではないかと考えている。

まずは、内容を把握できるように、言葉や文章を工夫し、絵など視覚的な情報も加え、読み語りやストーリーテリング、絵本や紙芝居など、さまざまな伝え方を取り込みながら、伝来の物語に触れることが大切だと考える。

昔話、伝説、説話、神話、絵巻物、絵入り本、絵草紙など、掘り起こしたい教材はまだある。教材化や指導方法には乗り越えなければならぬ課題は少なくないだろうが、今伝えなければ途絶えてしまうのが、伝承であり、古典である。そこには途絶えさせてしまふにはあまりにも惜しい、生きるための〈智恵と勇氣〉がある。大人が愛情を持って、直にこれらの物語を伝えれば、子どもたちはそれを喜びをもって受け止めてくれ、また次の世代へと引き継いでくれるはずである。家庭や地域、そして学校で、豊かな〈物語経験〉が展開されることが、今こそ求められている。

かとう やすこ 梅花女子大学文化表現学部児童文学学科教授。近代以前日本児童文学を担当。専門は江戸期の絵草紙。著書に『幕末・明治豆本集成』等。